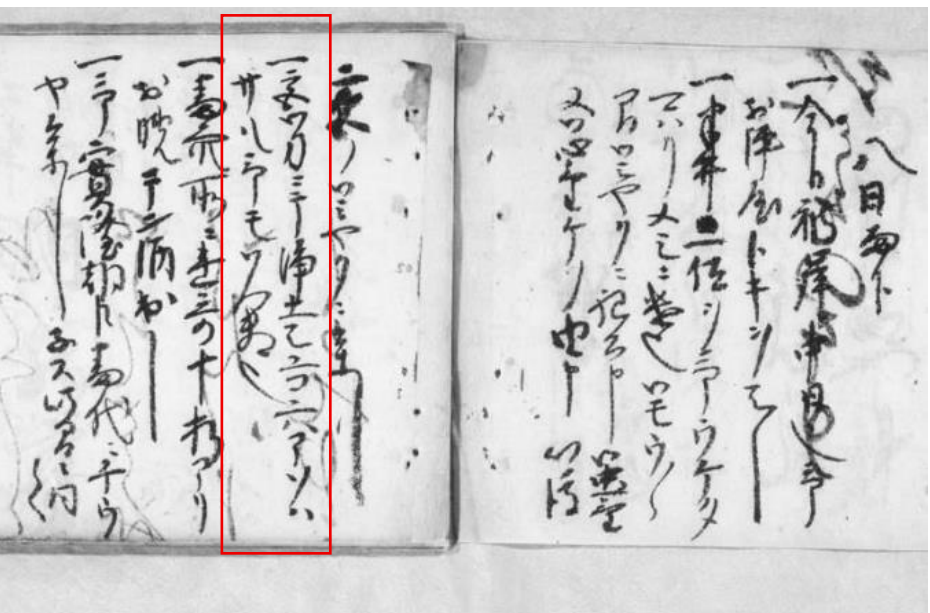


■資料① 言国卿記 文明6年Ⅱ1474年8月8日
宮内庁書陵部所蔵資料目録・画像公開システムより



○原文

一、宮御方ニテ浄土シユコ六（※1）アソハサル
予（※2）モ御人数也

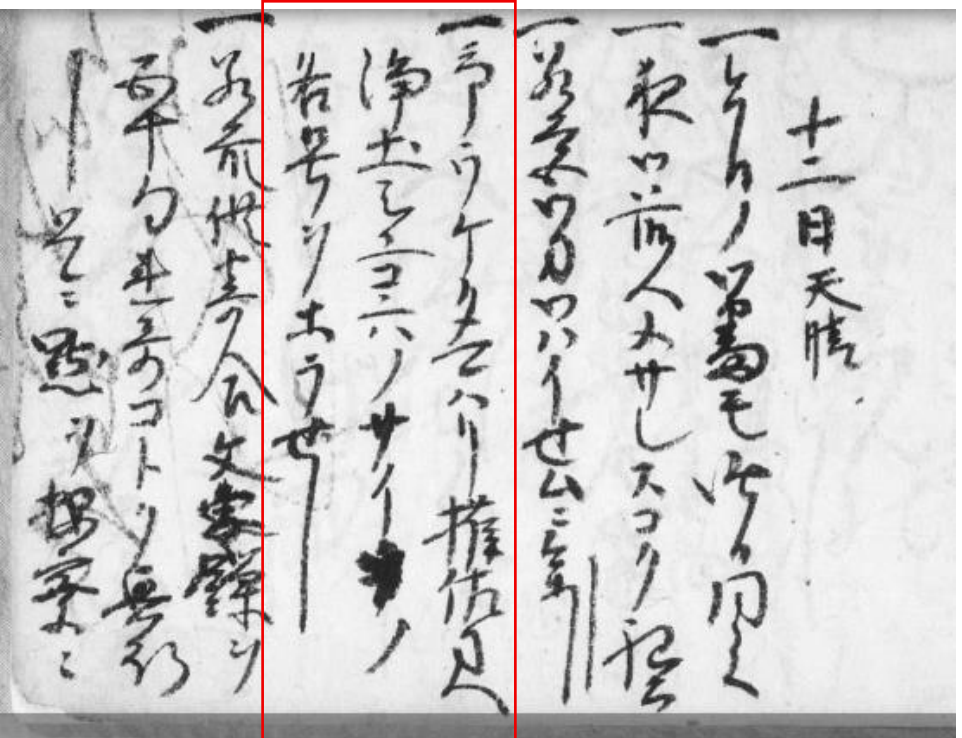
○内容

一、宮中において浄土双六を遊ばれた
私もそのうちの一人だ

※1 浄土壽古六と思われる

※2 筆者の山科言国（ときくに）

■資料② 言国卿記 文明6年（1474）8月12日
宮内庁書陵部所蔵資料目録・画像公開システムより



○原文

一、予（※1）ウケタマハリ、権佐（※2）方 浄土シユコ六ノサイヲノ名号ヲホラセ了

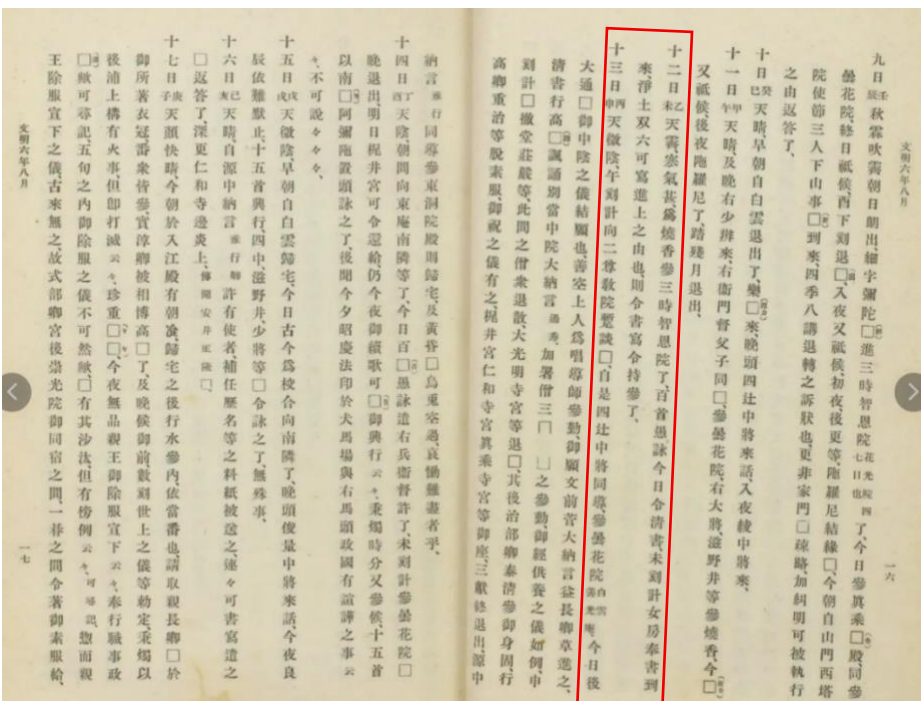
○内容

一、私は拝受し、権左対して、浄土双六のサイコロに名号（仏名など）を彫らせ、完成した

※1 筆者の山科言国（ときくに）

※2 権佐（ごんのすけ） 古代日本の官職であり、天皇の周囲を警護し、行幸や行啓の際に供奉する役割を果たした

■資料③ 実隆公記 文明6年(1474) 8月12日
 国立国会図書館サーチより



○原文

十二日 未乙 天霽、寒気甚、為焼香参三時知恩院了、百首愚詠今日令清書、未刻女房

奉書到来、浄土双六可写進上之由也、則令書写令持参了、

○内容

十二日 (※1) 未乙 (※2) 天気晴、寒気甚だし、焼香のため三時に知恩院、

下手な百首の歌を、今日、清書させた 未の刻 (※3) 女房が奉書を届けてきた

(後土御門天皇より三条西実隆に) 浄土双六の写しを作って進上せよという内容だ

早速書き写して持参させた

※1 文明六年（一四七四年）八月十二日は現在の九月十七日頃にあたる

※2 未乙 ひつじのきのと 午後一時十分前後 昼食後・午後早めの時刻

※3 未刻 みのこく 午後一時～三時



三條西実隆像紙形（土佐光信筆）

■資料④ 仏教（浄土） 双六の例

縮圖再鑄 佛法雙六 證果増進之圖
（しゆくずさいせん ぶつぽうすごろく しょうか
どうしんのず .. 明治時代）

詳細は築地双六館の双六データベースの解説を参照のこと

[illegible]

【参考】

■実隆公記

室町時代後期の公家、三条西実隆（さんじょうにし さねたか）の記した日記。期間は、文明6年（1474年）から天文5年（1536年）までの60年以上に及ぶ。同時代の一級資料。記述は京都の朝廷、公家や戦国大名の動向、和歌、古典の書写など多岐に及ぶ。自筆本が現存し、1995年（平成7年）に重要文化財に指定された。

同時代の一級資料。記述は京都の朝廷、公家や戦国大名の動向、和歌、古典の書写など多岐に及ぶ。自筆本が現存し、1995年（平成7年）に重要文化財に指定された。室町時代後期の公家文化を理解するのに有用な史料である。鎌倉時代から室町時代前期の日記とは異なり、儀式に関する記述はわずかで、多くが禁裏への出仕、歌会、寺社参詣、火災や戦乱などの記述で占められている^{〔二〕}。これは同時期の公家の日記に共通する特徴である。

高橋秀樹によると、実隆は「中世で一番の著述家」として群を抜いており、実隆なしに中世後期の文化を語ることはできず、『実隆公記』なしに中世後期の歴史を語ることもできない、としている。実隆の死後400年以上にわたって、自筆の原本は三条西家に代々伝えられてきたが、太平洋戦争後に東京大学史料編纂所に移管され、同所に所蔵されている。翻刻版が、続群書類従完成会より刊行されている。

■言国卿記

室町時代の公家、山科言国（やましなときくに・1452-1503）の記した日記。『史料纂集』所収。記述は、文明6年（1474年）から文亀2年（1502年）までの30年近くに及ぶ。途中に一部欠落があるが、応仁の乱期の京都や朝廷、幕府などの動向などを知ることができる貴重な史料。音楽関係の記事や、一揆についての記載もあるという。また、絵双六の最古の記載がある。文明9年（1477年）には自らが領主となっている荘園が有名無実化している実情を將軍足利義政に訴えたが、戦乱の影響により為す術がなかった実情を記している。

山科家は禁裏供御を管掌する内蔵頭を世襲していたので、この時期の皇室経済や衣服・食物のことを知る上で重要。自筆原本は宮内庁書陵部に18冊、京都大学に1冊所蔵されている。

■御湯殿上日記（おゆどののうえのにつき・お湯殿の上の日記）

御所に仕える女官達（内侍司の典侍、内侍など）によって書き継がれた当番制の日記。

禁裏（宮中）にある清涼殿御湯殿の側に女官達の控えの間、御湯殿の上1及び2があり、そこに備え付けられていたといわれている。当番の女官によって交替で書かれたもので字体は女房文字（仮名文）であるが、記録体の部分もある。稀に当代の天皇自身が代わりに書いたと思われる箇所もあるとされている。

本来はいわば宮中の機密日誌（秘記）であり非公開のものであったが、後日の参考のために写本が作られる場合もあり、そのため正本・写本・抄本を合わせると室町時代の文明9年（1477年、後土御門天皇代）から文政9年（1826年、仁孝天皇代）の350年分の日記が途中に一部欠失があるもののほとんどが伝わっている。『続群書類従』補遺三として文明9年より霊元天皇の貞享四年（1687年）までの約200年分が刊行されている。特に戦乱の激しかった戦国時代の記録が残されているという点で貴重な史料である。また宮廷の女性達が用いていた文字や言語（女房言葉）の研究の分野においても貴重な資料となっている。

■後土御門天皇（ごつちみかどてんのう）（1442―1500）

第103代天皇（在位1464―1500）。名は成仁（ふさひと）。法名正等観。後花園（ごはなぞの）天皇の子。

母は藤原孝長の女（むすめ）で、内大臣大炊御門（おいみかど）信宗の猶子（ゆうし）になった嘉楽（からく）門院信子。父天皇の譲を受けて位につき、応仁の乱に際会してつぶさに苦難をなめ、明応（めいおう）9年9月28日崩御。そのとき費用がなく葬儀を行うことができず、内裏（だいり）黒戸に遺骸（いがい）を置くことゝ余日、11月11日ようやくにしてこれを執り行うをえた。同天皇には歌集が種々存したことが諸書にみえるが、今日に伝存するものとしては、『紅塵灰集（こうじんかいしゅう）』と称する1巻、『百日和歌詠草』の1巻が著聞する。京都の深草北陵に葬る。

日本大百科全書（ニッポニカ）「村田正志」